京都秋期福音特別集会（3）

新天新地と再臨
――ヨハネ黙示録第21章～22章――

１９８４年11月25日
小池辰雄

新天新地　神の幕屋　一切一新　一極絶対の無　神の民　アルパなり、オメガなり　神の栄光
羔羊の灯火　生命の水の河　我々が黙示録の現実になる　無の魂の告白　きたり給え　われ速やかに到らん

【ヨハネ黙示録21】

1 我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。2 我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。3 また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、4 かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も、号叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』5 斯て御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き記せ、これらの言は信ずべきなり、真なり』6 また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。7 勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。8 されど臆するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、人を殺すもの、淫行のもの、咒術をなすもの、偶像を拝する者および凡ての偽る者は、火と硫黄との燃ゆる池にて其の報いを受くべし、これ第二の死なり』

9 最後の七つの苦難の満ちたる七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、我に語りて言う『来れ、われ羔羊の妻なる新婦を汝に見せん』10 御使、御霊に感じたる我を携えて大いなる高き山にゆき、聖なる都エルサレムの、神の栄光をもて神の許を出でて天より降るを見せたり。11 その都の光輝はいと貴き玉のごとく、透徹る碧玉のごとし。12 此処に大いなる高き石垣ありて十二の門あり。門の側らに一人ずつ十二の御使あり、門の上に一つずつイスラエルの子孫の十二の族の名を記せり。13 東に三つの門、北に三つの門、南に三

つの門、西に三つの門あり。14都の石垣には十二の基あり。これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。15我と語る者は都と門と石垣とを測らん為に金の間竿を持てり。16都は方形にして、その長さ広さ相均し、彼は間竿にて都を測りしに一千二百町あり、長さ広さ高さみな相均し。17また石垣を測りしに人の度、すなわち御使の度に拠れば百四十四尺あり。18石垣は碧玉にて築き、都は清らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。19都の石垣の基は、さまざまの宝石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二は瑠璃、第三は玉髄、第四は緑玉、20第五は紅縞瑪瑙、第六は赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。21十二の門は十二の真珠なり、おのおのの門は一つの真珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。22われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。23都は日月の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊はその燈火なり。24諸国の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光栄を此処に携えきたる。25都の門は終日閉じず（此処に夜あることなし）26人々は諸国の民の光栄と尊貴とを此処にたずさえ来らん。27凡て穢れたる者、また憎むべき事と虚偽とを行う者は、此処に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此処に入るなり。

【ヨハネ黙示録22】

1御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の真中を流る。2河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を医すなり。3今よりのち詛わるべき者は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕らは之に事え、4且その御顔を見ん、その御名は彼らの額にあるべし。5今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照らし給えばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。

6彼また我に言う『これらの言は信ずべきなり、真なり、預言者たちの霊魂の神たる主は、速やかに起こるべき事をその僕どもに示さんとて御使を遣し給えるなり。7視よ、われ速やかに到らん、この書の預言の言を守る者は幸福なり』

8これらの事を聞き、かつ見し者は我ヨハネなり。斯て見聞せしとき我これらの事を示したる御使の足下に平伏して拝せんと為しに、9かれ言う『つつしみて然か為な、われは汝および汝の兄弟たる預言者、また此の書の言を守る者と等しく僕たるなり、なんじ神を拝せよ』

10また我に言う『この書の預言の言を封ずな、時近ければなり。11不義をな

す者はいよいよ不義をなし、不浄なる者はいよいよ不浄をなし、義なる者はいよいよ義をおこない、清き者はいよいよ清くすべし。12視よ、われ報いをもて速やかに到らん、各人の行為に随いて之を与うべし。13我はアルパなり、オメガなり、最先なり、最後なり、始なり、終なり。14おのが衣を洗う者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく権威を与えられ、門を通りて都に入ることを得るなり。15犬および呪術をなすもの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拝する者、また凡ての虚偽を愛して之を行う者は外にあり。

16我イエスは我が使を遣して諸教会のために此等のことを汝らに証せり。我はダビデの萌生また其の裔なり、輝ける曙の明星なり』

17御霊も新婦もいう『来りたまえ』聞く者も言え『きたり給え』と、渇く者はきたれ、望む者は価なくして生命の水を受けよ。

18われ凡てこの書の預言の言を聞く者に証す。もし之に加うる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加え給わん。19若しこの預言の書の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給わん。

20これらの事を証する者いい給う『然り、われ速やかに到らん』アァメン、主イエスよ、来りたまえ。

21願くは主イエスの恩恵、なんじら凡ての者と偕に在らんことを。

●新天新地

黙示録第21章です。

1我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。

当時の地中海は、東の方は非常に問題のある海ですから、それで、

「海も亦なきなり」

という言葉も出てくる。「新しき」という字は「カイネー」という字で、「ネオス」でなくて「カイノス」の方です。古びない永遠に新しい天と地であった、ということ。そういう古びない新しさです。地上の新しいものはみな古びていきますけれども、天界の新しいのは古びない。

「天が下にこれは新しいというものはない」

と、伝道の書の

「空の空なるかな」

の中に出てきます。ところが、ただ一つ新しい事が起きた。それはキリストという存在が現れたこと、これは歴史の中で本当にただ一つの新しいことです。キリストは古びない存

在ですから。そういう意味で、あの伝道の書の句は非常におもしろい。天下に新しいものは一つもない。ところが、ただ一つの例外が起きた。それが現れて本当に新生が、もはや死を知らないところの新しい生命がキリストを通して現れてくるわけです。そして、それが与えられる。これが「新天新地」なんです。どんな天地だか分からないですよ、神さまが開示する新しい天地は。ヨハネは大変な霊幻を見させられた。これは幻でありながら、驚くべき現実の象徴、徴なんです。聖書は、その意味において、徴の宗教です。キリスト自身が徴の焦点です。

2 **我また聖なる都、新しきエルサレムの、**
地上のパレスチナのエルサレムではない。
夫のために飾りたる新婦（はなよめ）のごとく準備（そなえ）して、神の許をいで、天より降（くだ）るを見たり。

素晴らしい光景なわけです。こんなのは本当に啓示ですね、はっきりと。

●神の幕屋

3 **また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在（いま）して、**
4 **かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。**

「給わん」ではない。「拭い去り給う」です。はっきりしている。非常に畳みかけて繰り返して言っている。

「幕屋」という言葉は創世記から黙示録までこのようにして現れている。だから、私は「教会」という表現は余り好きではないので、「幕屋」ということを言いだした。神さまの旅路、イスラエルの出エジプトの旅が一番その象徴的な旅です。幕屋を張っては畳んでまた進んで行くという、非常に動的な在り方です。大変親しみのある言葉です。神さまと人が一緒にそのテントの中に住むというわけです。もちろん、神さまはキリストにおいて現れている神でありますから、私たちにとっては具体的にはイエス・キリストです。キリストとの旅、そして、新天新地においてそういう幕屋の中に住む。この天幕の中は聖霊です。聖霊の気が、霊気が充満しているところの幕屋です。

「神―キリスト―聖霊」

三位一体の事態がこの幕屋の中にちゃんとあるわけです。中央にはキリストの大黒柱が立っている。これは十字架の形をしています。

聖書は、「神とイスラエル」「キリストとエクレシア」、これが「夫と妻」の関係になっている。それで、祝福された光景が、

「新しきエルサレムの夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり」

ということです。人生の一番の花時であります。神・キリストと我々・人との関係は、質的には霊的な関係、霊的人格の関係です。そして場所的には一定の場所でない。自在に至る所が神の幕屋の場所なんです。球体というものは、どの球面の一点をとっても、それがその球面の中心になるわけです。一球体、無数の中心というわけです。幕屋一つ一つにおいてキリストが本当にその中心となって、いくつあろうとも、キリストは全的にそこに臨んでくださる。ちょうど、葉末の露に満月がどこにも全的に宿るのと同じわけです。

●一切一新

4 **かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎（かなしみ）も、号叫（さけび）も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』**

けれども私は、涙はあると思う。それは感激の涙、歓喜の涙です。我々が賜っている豊かな情感の世界、それはひとつも干からびないで、天界はもっと潤いのある素晴らしい所だと思う。もちろん、この「涙」というのは悲痛の涙という意味でしょうけれども、そういう涙はない。本当に本格的なパラダイスをここに簡単に言っている。ヨハネも初代教会の一員としてたくさんの苦しみ、涙、悲しみを担ってきた人ですから、こういうことが逆に深く出てくるわけです。

5 **斯て御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』**

ここに「一切一新」と書きました。すべてをもう古びないものにする。そこはもう聖書も要らない。私たち自身が即ち活ける文字です。

「汝らは主の書（ふみ）である」

とパウロが言いましたが、我々自身が聖書の生き証人、また活字、活きた文字というわけです。もはや古びないところの不滅の新しさは展開してやまない。この新しさの内容は一つではない。内容は無限無量に展開していく。創造また創造の展開だと、私は思っている。地上の我々はせいぜい長生きしたところで百年、そんなものは序曲で、本番はみなあちら側です。地上の生涯は序曲です。

そういう気持で人生を暮らしている青年が今日本に一体、幾人いるかというくらい情けないわけです。全く今の教育はね、もう学校なんかみな解散してしまうといい。全部、塾にしてしまう。佐久間象山や吉田松陰は生命賭けの塾生活をした。彼らは烈々たる魂だ。

白隠の師の正受聖人が彼を鍛えて、いよいよ別れる時に、送られていく白隠に、

「お前はただ一人、本ものをつくれ」

と言ったそうです。

「ただ一人の本ものをつくれ、いい加減なものをたくさんつくったってしょうがない」

という師の遺言的な言葉に、白隠は「分かりました」と答えた。白隠は全く正受聖人のた

だ一人の弟子といってもいいようなわけでしょ。あなた方一人ひとりがそのただ一人になればいいんだ。

「個の価値は全世界とも代えられない」

とキリストは言ったではないですか。そういうのが本当に集まったところに、何ものもこれに勝つことのできないグループになる。ところが、今はただ多を頼みとして、すべてが多数決でする。日本の民主主義なんて掃いて捨てたくなるよ。もうはっきり、神主主義と言った方がいい。民主ではなく神主です。我々は神主道です。

●一極絶対の無

要するに、こちら側は何ものでもない。キリストがはっきりそういう道をご自分でお歩きになったのだから。

「私をなぜ善いと言うか、神さまの他に善いものがあるか」

という。ああいう御言は、私は本当に感激した。

キリストに会って十字架で空っぽにされたこの無の世界、これは私は本当に何ものとも代えられない。これは絶対無の世界ですから。有と無の相対的な関係の無ではない。

「無の向こう側は有か」

なんて、そんなことではない。無と有という相対関係の無ではない。これは一極絶対の無なんです…（異言）…。そういう無の世界にはキリストが全的に生きてくださる。だから、この八方破れを通して不思議な事が起きるわけです。行き詰まりを知らん。

よく、私は夢の中で幻を見る。それがひとつの、自分の生活の中の預言になってくる。誰が

「十二年かけて詩を書く」

ということを告白する者がいるか。私は本当に迫られて、これはキリストがさせてくださるから、はっきり言えるんです。

黙示録の最後の新天新地は、実は現に今、我々はその新天新地の中に双葉の如くにして入っている。

召団は――私はいつ仆れたっていい――あなた方が必ず進んで行く。その代わり、「十字架・聖霊」を抜きにしたら、倒れる。十字架・聖霊が本当に身についていたら、どんな事が起きても、進んでいく。人間的な協力は要らん。自ずから協力せざるを得なくなっていく。自ずから助け合いをせざるを得なくなってくる。それができなかったら、それは聖霊がいないわけです。そういうようなわけで、私はもう安心している。安心しているということは、逆に言うと、恐ろしいことなんですよ。その世界からもし抜けたら、ひっくり返るということです。人間的な安心ではないから。けれども、キリストと内在的関係の中に入って、「エン・クリスト」ならば、これは艱難辛苦やいろいろな行き詰まりやいろいろな事に遇えば遇う

ほど、逆に力が来る。本当です、逆に力が来ます。逆に力が来なかったら、それは聖霊の世界ではない。本当に聖霊が来たら、逆に力が来る。正比例ではない、反比例する。それだから、我々の天国というのはそういう新天新地で、常に新たなる力が展開してやまない。行き詰まったかと思ったら、爆発していく。

今、私たちがこの集会をしているのは、

「視よ、新たなり」

というが、常に乗り越えて進んで行く。常に乗り越えて進んで行かざるを得ないような、そういうようなのが「新た」なんです。プロテスタントというのは自己にプロテストして進んでいく。カトリックにプロテストするのではない。己を乗りこえていく。人間は、現実は相対的存在だ、絶対矛盾の自己同一なんだ。その奥の、あなた方一人ひとりの中の奥に居たもうところの、焦点になっていたもうところの、聖霊のキリスト。

「聖霊のキリストは、全世界の誰が何と言おうとこれを否定することができない」

と、はっきり言えるのがクリスチャンです。

「我生く、故に汝は生く」

とキリストが言われているではないですか。そういう新たな世界です。

●神の民

3 **また大いなる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在(いま)して、**

ここには「と偕に」とばかり書いてある。

「共在・内在・貫在・遍在」

ということ。聖書の文句は、言い切れないでいるから、その背後の文字も御霊の力で読んでいかなければダメです。

「聖書にそう書いてないではないか」

なんて、普通の聖書学者はすぐそういうことを言う。パウロやキリストは考えながらものを言っているのではない、その時に示された事を爆発的にものを言っている。時間的にも空間的にも自由自在な世界です。この次元の現実は、時間を掌握し空間を支配している現実です。時間が過ぎていくということをもはや思わない。古びないんだから。

「我よりも何々を愛する者は我に相応(ふさわ)しからず」

とキリストは言われたでしょ。

「人間の相対的な関係をどうのこうのといろいろな事を思っているうちはダメだ。私だけだ。この一対一の関係をしっかり立てろ。そうしたら、これらを全部逆に救いあげてしまうぞ」

と、あのキリストの言葉は凄い。

「家の中で紛争を起こすぞ。親は子に、母は娘に……」

と書いてある。あんなことを言うものだから、いわゆる道徳家は、キリスト教は危険思想だなんて思う。そうではないんだ。

「横ではない、先ず縦の関係をしっかり立てろ。そうしたら、横は全部お前が救いあげてしまう、お前が本当に助けあげてしまうぞ。その為だぞ」

ということなんです。何と言われようとも、どう思われようとも、いいですよ、皆さん。そんなことを遠慮していてはダメです。その代わり、キリストの愛があなた方を通して、

「彼らに今に、ああこんな素晴らしい世界かといって気がつくようにしてやるぞ」

ということです。あのキリストの言を我々自身が実証していかなくては。ことに女の方はいろいろなことをお思いになるわけです。しかし、いいですよ、ジャンヌ・ダルクみたいになってください。こちらは必ず勝ちます。勝つということは、相手を救い上げ、担い上げてしまうということです。いいですね、これは本当ですよ。老若男女にかかわらない。

キリストの在るところ、かくの如くその人が天国を必ず周囲に現じていく。それを受けとらない者はサタンに捕らわれているからで、それは本当にひっくり返って目が覚めなければ、第二の死、地獄のゲヘナの方へいってしまうだろう。仕方がない。十字架の片一方のやつはそうなってしまった。もう片一方はいきなりキリストと一緒に天国に行ってしまった。人間の間のどんな問題も、この角度から全部救い上げてしまう。これは論理的な解決のことを言っているのではない。

救い上げてくる人は即ち十字架を負っている人です。そういう人が「新婦」なんです。十字架のキリストという新郎に対して、新婦は十字架を負っている新婦である。これが新天新地の神の民である。ですから、パウロが言ったでしょ、

「キリストの苦難の一端を担う」

と。

●アルパなり、オメガなり

6 **また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。**

「生命の水」という言い方は、イザヤ書にもエレミヤにも詩篇にも方々に出てくる。ああいう荒野ですから、特に水が大事なわけです。

「我はアルパなり、オメガなり」

とは、

「我は創世記なり、黙示録なり。我は全聖書なり。我は原因なり、目的なり。創造なり、完成なり」

ということです。

"Boys be ambitious in Christ!"
「少年よ、キリストにあって望みを抱け！」
という。

「イン・クライスト」
を抜かしてはダメです。キリストに於ける望みというのは、神の栄光がそこに現れる望みです

一人の人がキリストに祈って、それが本当に動きだすと、そこらに波風がたつ。あなた方、満々たる希望に満ちてきたでしょ。人生は非常に使命感と抱負に満ちている。何をなさっていてもいい。存在そのものが――どういう事をしているかではない――一番深い伝道をする。周りの人に、何だか知らんけれども、光と熱が現れてくる。仁王さんの周りに火が灯っているようなわけだ。親鸞上人が軒端で寝ていれば、その周りに微光がさしていたのでびっくりしたという話があるでしょ。

祈るということは、いよいよキリストの中に入ってキリストと一つになることが、これが祈りの一番の事態なんです。そこから、派生的な祈りは全部聞かれていく。先ずキリストと一つになる。そうしたら知らない間に、何か知らないけれども、展開していく。この絶対次元というのは本当にありがたい。

大創造者の神さまと共に創造的な人間として進んでいく。終りなきと言ったって、これで終わって何も無いという意味ではない。最後の目的は限りなく展開していくところの場である。天界は永遠にその中で展開していく。これが永遠無窮ということです。宇宙的だ。宇宙の涯（はて）は分からんでしょ、大変なものだ。宇宙的な気宇の人間になる。

日本において、福音は最後の花が咲く。本当ですよ。もうヨーロッパはダメです。

「御名のためには、神の為には狂えるなり」

とパウロが言ったでしょ。どうぞ、皆さん、若い方々が本当にそれくらいのことでいかなくては。この集会は、最後の集会が限りなき展開の集会なんです。あなた方自身が限り無く展開する。

「終りが即ち始めなり」
という、そういう集会であります。

●神の栄光

7 **勝（かち）を得る者は此等のものを嗣（つ）がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。**
8 **されど臆するもの、信ぜぬもの、憎むべきもの、人を殺すもの、淫行のもの、呪術（まじわざ）をなすもの、偶像を拝する者および凡ての偽る者は、火と硫黄との燃ゆる池にて其の報いを受くべし、これ第二の死なり』**
9 **最後の七つの苦難の満ちたる七つの鉢を持てる七人の御使の一人きたり、**

我に語りて言う『来れ、われ羔羊の妻なる新婦を汝に見せん』10御使、御霊に感じたる我を携えて大いなる高き山にゆき、聖なる都エルサレムの、神の栄光をもて神の許を出でて天より降るを見せたり。

その新婦はどんな新婦かというわけだ。

11その都の光輝はいと貴き玉のごとく、透徹る碧玉のごとし。12此処に大いなる高き石垣ありて十二の門あり。門の側らに一人ずつ十二の御使あり、門の上に一つずつイスラエルの子孫の十二の族の名を記せり。13東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門あり。

「三・四」は「天・地」で、「十二」は天地融合の世界です。

14都の石垣には十二の基あり。これに羔羊の十二の使徒の十二の名を記せり。

「その中にパウロがいるかいなか」なんて下らないことを言っているのがある。みなこれは象徴ですから、そんなことをゴタゴタ言う必要はない。

15我と語る者は都と門と石垣とを測らん為に金の間竿を持てり。16都は方形にして、その長さ広さ相均し、彼は間竿にて都を測りしに一千二百町あり、長さ広さ高さみな相均し。

立方体だね、サイコロみたいなものだ。

17また石垣を測りしに人の度、すなわち御使の度に拠れば百四十四尺あり。

「百四十四」は十二の十二倍だ。一年は十二ヶ月。黄道十二座。十干十二支。時計は十二時。この十二というのは不思議な妙なものだ。これを完全数という。各辺が丁度一万二千スタディオン、約二千キロメートルになるという、大変な大きなものです。そんな都が降りてきた。東京から京都まで約五百キロだろ。

18石垣は碧玉にて築き、都は清らかなる玻璃のごとき純金にて造れり。19都の石垣の基は、さまざまの宝石にて飾れり。第一の基は碧玉、第二は瑠璃、第三は玉髄、第四は緑玉、20第五は紅縞瑪瑙、第六は赤瑪瑙、第七は貴橄欖石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶なり。21十二の門は十二の真珠なり、おのおのの門は一つの真珠より成り、都の大路は透徹る玻璃のごとき純金なり。

これは大変なものだ、きらびやかで目が眩んでしまう。

●羔羊の灯火

22われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊はその宮なり。

いわゆる人間が造ったような宮がなかったという。神殿があるかと思ったら、無神殿なんだ。神・羔羊が宮であって、また、その中に住む民一人ひとりが宮である、神殿である、聖霊の宮である。これはパウロがコリント書翰で言っているとおりです。我々はそういう

活ける神殿である。キリストが、

「**三日でもってこれを立てるぞ**」

と言ったのは、キリストは、

「三日目に甦って、私自身という神殿が立つぞ」

ということです。ヘロデの住んでいたような所ではない。第二神殿はひっくり返ったって、第三神殿なんかは造る必要はない、ということです。三日で立った第三神殿はキリストですから。

22節は非常に愉快な言葉ですね。神殿は有ったっていいですよ。問題は、形は有ろうが無かろうが、そんなことにはこだわらないということ。教会が有ろうが無かろうが、結構でございます。有れば、それを本当に活ける教会として使っていく。無ければ、ビルディングのどこかでも構わないし、野原でもいい。それが本当の自由自在な活ける神殿の動いている世界です。すべてのものを活かしていく。

「絶対というのは、相対界においてそこに絶対なものを展開していく」

ということです。我々は相対界から逃げるわけにはいきません、相対界に居る。けれども、そこにありながら、何かの、相対界を完全に抜け出ているような存在、そしてその相対界を活かしている存在、それが本当の絶対ということです。

23 **都は日月（じつげつ）の照らすを要せず、神の栄光これを照らし、羔羊（こひつじ）はその燈火（あかり）なり。**

神の栄光、羔羊の燈火という。ここにはたくさんいい言葉がある。新天新地、神の幕屋、一切一新、神の栄光、羔羊の灯火、主の再臨。この一つ一つの句に非常な中身が含まれています。これも一つの徴であります。

「**羔羊は燈火（あかり）なり**」

というが、私たちもまた羔羊と一緒に燈火にならなければダメです。天国は、

「**日月の照らすを要せず**」

という。みな螢みたいに光っているんだ。きれいだろうな。

私たちはこの最後の新天新地のこういった現実を今、現在化して読んでいなければしょうがない。

「はいっ。日月は照っていても、キリストの光の方がもっと凄い。夜は、歩いてもその光でもって歩いています」

ということです。詩篇の中にも「燈火（あかり）」という言葉が出てきますけれども、私たち自身が羔羊の燈火となるわけです。羔羊の燈火、ランタンになる。キリストに下げられて歩いている、

「お前、よく光るなぁ。ねぼけては困るぞ」

なんて。そういうような光となって、現在を歩いて行きたいということです。

24 **諸国の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光栄を此処に携えきた**

る。25都の門は終日閉じず（此処に夜あることなし）

常に開かれたる門です。

「ドロボーさんはお入りください、何でも持って行ってください」

と。良寛和尚は言ったね、

「盗人に取り残されし窓の月」

と。みな持って行ったけれども、窓の月ばかりは持って行かなかったなぁ、なんて。大したものだね、良寛さんというのは。布団なんかも皆持って行ってしまったらしい。良寛さんみたいな人はみな無的存在だ。ああいう一流の坊さんのものを読むと、頭が下がります。そういう開けっ放しの世界だという。開けっ放しは逆に強い。

「どうぞ、お入りください。何を上げましょうか」

と、『レ・ミゼラブル』のミリエル司教みたいなものだ。

26人々は諸国の民の光栄と尊貴とを此処にたずさえ来らん。

面白い言葉だね。各民族、また各社会、いろいろな人たちが大いにあっていいわけです。その様々な光栄がそこに携えられるというのは、本当に愉快な言葉です。これが本当のハーモニーの、有機体的な天国です。これは全体主義ではない。画一的な全体主義はいかん。

27凡て穢れたる者、また憎むべき事と虚偽とを行う者は、此処に入らず、羔羊の生命の書に記されたる者のみ此処に入るなり。

偶像崇拝とか虚偽はいかん。間違いはいいけれども、虚偽というのはいかん。キリストの生命をいただいて、本当にキリストの生命で生きているところの、キリストの生命を生命しているところの人が、この「羔羊の生命の書」に記される。地上で名前なんか要らん。

「神さまの天界の巻物に名前が書かれているか」

これだけが人生の問題だ。

●生命の水の河

黙示録第22章に入ります。

1御使また水晶のごとく透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔羊との御座より出でて都の大路の真中を流る。

「生命の水の河」は、詩篇第1篇やエレミヤの中にもあるとおり、地下水が樹を活かしている。

2河の左右に生命の樹ありて十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を医すなり。

葉が妙薬を持っている。だから、東洋の草根木皮の医学が新しく注目され始めたのはそのわけです。新天新地では、健全な実を結んでいる。自然の恩恵、神の恵みということです。

3今よりのち詛わるべき者は一つもなかるべし。神と羔羊との御座は都の中にあり。その僕らは之に事え、

人のたむろしている所を「都」というわけです。自然界は「田舎」と言いましょうか。都会と田舎、この両方を持っている都会は非常に健全です。あまり都会すぎているのはダメです。やはり、人間は自然を離れたならダメです。その点を一番言っているのがゲーテです。

「自然を征服するなんてとんでもないはなしだ。自然と親しめ。自然をいろいろなことで利用しているうちに、今に逆に困る時がくるぞ」

と、ゲーテは予言しています。大自然と人間とは生命の交流の中にある。動物も植物もみなそうです。やはりこれが、人間の身体と同じように、循環関係になっている。その法則をこの文明文化が非常に破っているわけだ。人間の頭が行きすぎてしまって、困ったものだ。しかし、これを停滞させようとしたって、困るだろうね。もう行くところまで行くのでしょう。そして、いろいろな事が行き詰まる。行き詰まると、もう後はやけくそですから、第三次やけくそ戦争ということになる。本当ですよ。冗談じゃないよ。

大体、アマゾンの大森林を段々こわしているから、アマゾンから出てくるところの酸素が非常に減ってきて、地球の天候も狂ってきたそうだ。とにかく、自然を損ねていたら、人間自身が本当に不自然なことになる。いろいろな意味において非常に問題だらけの現実です。この問題だらけの現実の、相対的ないろいろな改良の仕方は大いにやっていい。それをやるな、とは言いません。結構ですけれども、それではどうにもならん。相対的ないろいろな工夫をやっていることに対しては敬意を表します。けれども、ただ一つのことを欠く。というのは、魂の世界がお留守になっているということです。

「人間は魂があるということは、万人は宗教人である」

ということです。我々はその中で特にキリストの福音をこのようにして使徒的な次元において受けとらしめられつつある。だから、我々の存在は絶対に使命を持っている。

皆さん、それぞれのところで、どうぞ、証してください。証しなかったら、自分がダメになる。人生を燃やし切っていかなければね。何かまだ足りないようだね。どうぞ、足りなくないように。足りないというのは、キリストの中への入り方が足りない。

4 **且その御顔を見ん、その御名は彼らの額にあるべし。**

ダンテの『神曲』をみると、上の方へいくと、冥想の人たちが非常に高い所にいる。カトリックは多少そういう「メディテーション」（冥想）の方なんだ。けれども、本当は、神の世界で一番上に行っているのは、冥想ではない、「御顔を見ている」人ではない。光を後ろにして、前向きでもって、光を浴びながら自分を証している人たちです、行為者です。「行為によって」というのだから、その実存を問われる。その在り方――行為といったって、ただ枝葉の行為ではない――存在そのものが行為のような、存在即行為のような、そういう行為者が、私は最高の所に置かれていると思う。言い換えれば、十字架を最も烈しく負った人、殉道者、キリストの道に殉じた人です。冥想ではない。生命を福音のために使い果たした人です。

冥想といったって、私は目をつぶると、そのまま祈りの世界に入る。私の祈りは何時間

祈ったなんていうのではない。日常のどこでも祈りに入ってしまう。私は、決めて何時間祈るということはしない。本を読んでいても、読みながら祈ってしまう。その世界に入ると、読むことがまた祈りになってしまう。聖書なんかそうです。

私たちは「御名」はいただいています。けれども、この御名は見えない。見えざる文字です。十字架も見えない。中にある。十字架を付けていたっていいよ、一つの印だからね。

●我々が黙示録の現実になる

5 **今よりのち夜ある事なし、燈火の光をも日の光をも要せず、主なる神かれらを照らし給えばなり。彼らは世々限りなく王たるべし。**

「王たるべし」とは本当の意味で自主の人だということです。自主とは己に対して主であること、己に捕らわれていないということです。キリストが自分の主となって、自分が僕の人が本当に自主の人なんです。それが本当の自由の人です。自主自由というのは、神・キリストの僕にならなければダメです。「エホバの僕」ということがイザヤ書53章にある。

「主の僕の歌」

がイザヤ書にいくつもある。イザヤ書は本当に凄い。イザヤ書と黙示録をやって、わが酒杯は溢るるなりだ。

「燈火の光も日の光も要らない」

とある。在ったっていいよ。在ったっていいけれども、天界ではもう要らない。地上では光があってもいいよ。

「光があっても、私の本当の光はキリストです。私は電気の光で聖書を読んでいません、キリストの光で読んでいます」

ということにならなければダメです。だから、

「我々の現実が黙示録の21章、22章の現実になってください。21章、22章を今この相対的現実で本当に現象していてください」

というのがその意味なんです。天界を地上に既に天降(あも)りさせて、自分自身が、そういう意味において、天降りしているところの本当の新婦になっているわけだ。自分自身が宝玉になっているわけだ。ここに書いてあることがみな、その人において霊的に現象してくる世界です…（異言）…。そういうことになったら、もうこれは大変だ、楽しくて。百貨店にいって、宝石を見る必要はなくなる。ああ欲しいなぁ、ということはなくなる。

「宝石はここにありますよ、どれを上げましょうか」

なんてなわけだ。これは霊的現実で霊的具体性なんです、決して観念ではない。また、思い込みでもない。想像でもない。本当にキリストが来ると、そういうことです。キリストという言葉が普通は全然ダメです、そんな無限無量の内容を持ってないから。だから、それを私はどうしても詩で表現するよりか仕方がない。止むに止まれずして私は書くんです。

ここで、私の作った召団讃歌の18番「八十路の峠」の10節から12節までを歌わせてもらいます。

10　阿蘇の深山（みやま）の瀧見荘　聖霊降臨、新生よ！
使徒らの次元慕はしや　十字架・聖霊の現実を
生涯（いのち）を賭けて行き貫（ぬ）かん。

11　大道無門キリストの　無者たる実存賜りて
左顧右眄なくわれは往く　万人を抱くキリストの
無量の愛ぞ力なる。

12　八十路（やそじ）の峠を迎へたり　無尽の涙を霊泉（いずみ）とし
漲る血潮を霊火とし　吹き捲く聖霊を台風（あらし）とし
一大詩篇は成りゆかん！

本当にそうです、必ず成ります。無尽の涙と漲る血潮の霊火、吹き捲く聖霊は台風（あらし）となって、私の中で働く。もの凄いものができます。こんなキリストの福音をいただいて、黙ってはいられんですよ。各召団はそれぞれ凄い光を発してください。もう本当に勝利です。ケチ臭い魂ではダメですよ。開けっ放された烈々たる魂でやってください。

そしてもう、今日やると思ったら、徹夜でもできます、ちょっと祈れば。祈りに入ると力がくるから。

●無の魂の告白

6彼また我に言う『これらの言は信ずべきなり、真（まこと）なり、預言者たちの霊魂の神たる主は、速やかに起こるべき事をその僕どもに示さんとて御使を遣し給えるなり。7視よ、われ速やかに到らん、この書の預言の言を守る者は幸福（さいわい）なり』

8これらの事を聞き、かつ見し者は我ヨハネなり。斯て見聞せしとき我これらの事を示したる御使の足下に平伏して拝せんと為（せ）しに、9かれ言う『つつしみて然（し）か為（す）な、われは汝および汝の兄弟たる預言者、また此の書の言を守る者と等しく僕たるなり、なんじ神を拝せよ』

10また我に言う『この書の預言の言を封ずな、時近ければなり。

二千年たっても、質的にはいよいよ近いんです。

11不義をなす者はいよいよ不義をなし、不浄なる者はいよいよ不浄をなし、義なる者はいよいよ義をおこない、清き者はいよいよ清くすべし。

「清き者はいよいよ清くなる」

ということ。

「いよいよキリストにつくか、サタンにつくか、どちらかだ」

というわけです。

12 **視よ、われ報いをもて速やかに到らん、各人の行為に随いて之を与うべし。**

「報い」は要らんです。

「神さまの栄光が現れていらっしゃれば結構でございます」

と。この「報い」という概念はやはりヘブライ的な概念だ。

「目には目を、歯には歯を」

ということです。実存そのものが報いとなっている。栄光が現れていることそのものが報いであります。お互いに、そこに現れている神の栄光の故に尊重する。敬意を表する、心から握手する、相抱く。

「各人の行為に随いて之を与うべし」

やはりここでも「行為」とある。

「行為そのものが与えられたるもので、ご褒美であります。かく実行せしめられたことが、実存せしめられたことが、主さま、あなたの報いでございます」

と、それが無の魂の告白です。無一物無尽蔵というのはそのことです。

13 **我はアルパなり、オメガなり、最先（いやさき）なり、最後（いやはて）なり、始（はじめ）なり、終（おわり）なり。**

繰り返し言っている。

「創造なり完成なり、創世記なり黙示録なり、原因なり目的なり」

ということ。限りなく展開していくところの終りです。

地上の人生の終りは次の人生の始まりなんだ。死は永遠の世界への旅への関門である。死の峠を渡ったら、ダンテが最後に煉獄の絶頂に行って、それからベアトリーチェに導かれて天界に翔っていったでしょ。あのダンテというのは凄いことを書くね。私は『神曲』は一番好きだ。

●きたり給え

14 **おのが衣を洗う者は幸福なり、彼らは生命の樹にゆく権威を与えられ、門を通りて都に入ることを得るなり。**

我々は十字架で衣を洗う。

「十字架の血で衣を白くせられたもの」

と黙示録7章に出ているとおり。アダム・イブのときには、「生命の樹」を先に食べればよかったのに、「善悪の樹」をサタンに誘（いざな）われて食べたものだから、とんでもないことになった。

相対的な判断の世界は本当の世界ではない。もうひとつ越えなければダメです。それは内観直感の世界です。内観直感は、何で内観直感できるか。それはキリストの霊の光で。聖霊がくると、今度は、知情意が自在に自分でもって自在にあやつれる。知情意の三つの働きは、人間は誰でもが持っていなければいけませんよ。一つに偏ってはいかん。どれが強いかと

いうのは人によっていろいろだけれども。知情意はそれぞれこの三つの働きがなければダメです。ただし、それを統括するのはこの霊なんです。本当の知はエピグノーシスという。超知、知を超えたものです。

15 **犬および呪術（まじわざ）をなすもの、淫行のもの、人を殺すもの、偶像を拝する者、**
また凡ての虚偽（いつわり）を愛して之を行う者は外にあり。
16 **我イエスは我が使を遣（つかわ）して諸教会のために此等のことを汝らに証せり。**
我はダビデの萌生（ひこばえ）また其の裔（すえ）なり、輝ける曙（あけ）の明星（みょうじょう）なり』

霊のキリストもダビデをそのようにして重んじておられる。ダビデは王者、メシヤを表す。

「アブラハムの子、ダビデの子」

というのは

「信仰の子、王の子」

ということなんです。イザヤ書の

「明星よ、いかにして天より落ちしか」

という、あの「明星」は違うよ、あれはサタンだ。明星のような天使がおっこちた。ギリシヤではビーナスが明星だけれども。キリストは神の光を受けた明星であるわけです。月ではない。神の表しているところの星、

「輝ける曙の明星である」

という。神さまの先ぶれであるというわけです。道標（みちしるべ）である。

人工衛星は地球の周りを回っているだけだ、太陽系の方へ少しは出かけて行ったけれども。人間は出かけられませんよ。けれども、私たちは霊の世界では宇宙を散歩できるわけです。だから、天文学をやっても、宇宙を散歩するような気持でやったら大変楽しかろうと思う。不思議なものだね、この聖霊の霊の世界というのは。人間の頭の構造というものは大変なものだ。これは神さまの最大の作品でしょうね。

17 **御霊も新婦（はなよめ）もいう『来りたまえ』聞く者も言え『きたり給え』と、渇く**
者はきたれ、望む者は価なくして生命の水を受けよ。

身体は真清水を受けます。魂は火を受けます。この火も水も聖霊です。

「この火燃えたらんにはもはや何をか要せん」

という火は、魂の生命であるところのこの聖霊です。私たちの肉体は水がなければ生きられない。いくらお腹が空いてご飯を食べておいしくても、喉が渇いて水を飲んだときの方が更に私たちの満足になる。それほど水に渇くというのは大変なことだ。断食しても、水を飲まない断食は非常に辛いわけです。

ガンジーというのは凄いね、七十日か、断食したのは。彼は愛の人だ、とうとうインドを無血独立させた。本当に頭が下がりますよ。糸車をグルグル回しながらニコニコしている。愛は力がある。日支事変の時に吉林省という所は匪賊に随分やられて、日本人は片っぱ

しから殺された。その時に、或る奥さんが自分を切って夫に血を塗った。「あなたは血だらけになって倒れていてください。そうすれば、匪賊はあなたが死んだものと思ってあなたを刺しません」と言って、その奥さんは仆れた。その奥さんの犠牲の死によって助かった。そういう記事があります。

「愛は一切に勝つ」

という。愛は一切を救う。

だから、仏の大慈大悲であり、孔子の仁であり、キリストの愛である。全部共通している。ゲーテは、

「一切の愛は神からきている」

と言った。恋愛であろうと、親子愛であろうと、何であろうと。神から来ているということを本当に自覚していなかったら、みなその愛は狂ってくる。ゲーテは

「神―大自然―我」

が融合している大詩人です。

「来りたまえ」

とある。世界は本当にもうしょうがないよ、早く新天新地が来なければ。人生は要するに新天新地への序曲です。我々は、とにかくこれから百年たつと、ここにいる人はみな居なくなるわけだ。百年たつと、みな大体、居なくなってしまう。それが人生の序曲なんだ。

「新天新地よ、早く来たりたまえ。御国を来たらせたまえ」

というのは切実なる祈りなんです。キリストが居た頃に、

「お前たちは待っていろ、今にやって来るから」

と、それくらい間近にキリストは言っておられるのだから。そういった質的なことは今でも同じことなんです。

１９９９年は、ノストラダムスの予言の通り、ひっくり返るかもしれないね。私はノストラダムスを信じているわけではないけれども。私の詩ができ上がる時は１９９９年の２月の私の95歳の誕生日の時なんです。そこでもって、ノストラダムスの予言をくい止めてやろうと思っているわけだ。12年のあと、推敲して印刷するのにちょっと時間がかかるからね。ドイツ語と英語に訳してもらいたいけれども。

●われ速やかに到らん

18 **われ凡てこの書の預言の言を聞く者に証す。もし之に加うる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加え給わん。** 19 **若しこの預言の書の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給わん。**

20 **これらの事を証する者いい給う『然り、われ速やかに到らん』アァメン、**

主イエスよ、来りたまえ。

「速やかに来たりたまえ」

という。私たちは、願いは既に成っている。

「お前の願いは既に聞かれたるものとせよ」

とキリストが仰った。だから、「来たりたまえ」というのは、本当にキリストが来ていらっしゃるから、「来たりたまえ」と祈れるんですよ。来ていらっしゃらないで、「来たりたまえ」と祈ったら、これは空念仏になる。

「聖霊の主はわがうちにあり。だから、どうぞ、どんなことがあっても来てください。必ず来ますね、ありがとうございます」

と祈る。祈りは讃美になってしまう。讃美歌を歌いつつ歩まんという。

いいですよ、人生はみんな運命、環境はさまざまだよな。いろいろなことがあったよ、またこれからもあるかもしれない。けれども、そんな相対的な波、風、雲、嵐は、何でもいい。それを乗り越えた、それを突き破る光がある。どんな冷たい所も暖かくしてくださるキリストの愛がある。これを現実において本当に受けとっていく。

「私の信仰は…」

なんて、計算なんかしている人はダメだよ。「信仰」なんか要りはしない。絶信の信で、本願のキリストの祈りがやってくるんだ。それを受けとっていく。「本願」とはいい言葉だ。皆さんを見ていると、そこにもう御国が来ているわけです。

「御国を来たらせたまえ。はいっ、来ておりました。ありがとうございます」

というわけだ。

「われ速やかに到らん」

とある。「われ速やかに到らん」よりか、

「もう来ているよ、ここにいるではないか」

ということです。

「汝ら、悔改めよ、天国は近づきたり」

とキリストは言われたでしょ。

「汝ら、立ち返れ。天国である私がこんなに近くにいるではないか。私の所に早くやって来なさい。私の方から来たんだよ」

と。あのキリストの最初の言葉は黙示録のこれに通ずる。

「もう来ている」

という。御国は来たれり。すべて、現在完了を現在とすること。祈りは

「聞かれるだろうか？」

ではない。

「聞かれている」

ということ。

「現象はいつでも結構でございます、御意のままに。しかし、根源の現実はいただいております」

ということ。これが本当の信仰です。未完成交響楽で結構です。それは必ず天界において完成します。皆さんはキリストの姿に全部、化する。それぞれその人らしく化していく。パウロが言っているとおりです。

まぁ、凄いね、この聖書は。聖書は人間の思想ではありません。人間の思想はひとりも一人の人を救うわけにいかん。啓示の神の言葉だけが力を持っている。

「わが言は霊なり、生命なり」

というわけです。もうそこらと聖書の読み方が違ってきたでしょ。ベールが取れたでしょ。本当は羽が生えて飛んでいきたくなる。もう人間でなければ、私は鳥になりたいね、正直。

「われ速やかに到らん」

「もういらっしゃいました。有り難うございます」

と。キリストも、

「小池はあまり先取りしてしまって、しょうがない読み方をするやつだな。しかし、それは本当だ」

と思うでしょうね。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と言われた主さまは、

「そうだよ、その通りだよ」

と言ってくださる。

21**願くは主イエスの恩恵（めぐみ）、なんじら凡ての者と偕に在らんことを。**

最後はやはり祈りになって終わっている。

すべては、全存在で、身体（からだ）でぶつかっていくということ。身体で読み、身体で聴き、身体で書き、身体で見る。身体で行ずる。身体で告白する。キリストは何と言われましたか。

「我を食らえ、我を飲め」

と言われたでしょ。キリストを食らい、キリストを飲むという、本当にキリストと一つになってしまっている。それは全部、身体的な消息なんです。福音は身体的消息なんです。

「主はわが骨の骨、わが肉の肉なり」

と。キリストは私たちに、

「汝はわが骨の骨、わが肉の肉なり」

と、そのような霊的な驚くべき生命の関係です。